

学校生活意識についての小中ギャップの分析

—— 鳴門市における質問紙調査結果の経年比較より ——

葛 上 秀 文

(キーワード：意識調査, 中1ギャップ, 縦断的調査)

I はじめに

本論文は、鳴門市教育委員会と大学との連携において進めている学校評価改善に向けての取り組みの中で、過去の学校評価結果を再分析し、市内の学校に結果の有効活用の視点を提供することを目的としている。

学校評価については、義務教育段階の各学校・教育委員会における学校評価の取組の参考に資するよう、平成18年3月に文部科学省において「義務教育諸学校における学校評価ガイドライン」(文部科学大臣決定)を作成し、目安となる事項を示してきた。

その後、平成19年6月の学校教育法改正により学校評価の根拠規定が新設され、これを受け同年10月に、学校教育法施行規則において、自己評価の実施・公表、保護者など学校関係者による評価の実施・公表、自己評価結果・学校関係者評価結果の設置者への報告、に関する規定が新たに設け、平成20年度からの学校評価の取組に活用できるよう、文部科学省において「学校評価ガイドライン」が改訂された。

改訂のポイントは以下の通りである。

(1) 学校の事務負担の軽減を図るとともに、学校評価の取組がより実効性を高めること、(2) 学校評価を実効性あるものとし、かつ、学校の事務負担を軽減する観点から、自己評価について、網羅的で細かなチェックとして行うのではなく、重点化された目標を設定し精選して実施すること、(3) 児童生徒・保護者対象のアンケート調査について、その内容の充実と事務負担の軽減のため、網羅的に行うのではなく、重点目標に即した項目により行い、自己評価に活用すること、(4) 保護者による評価と積極的な情報提供の重要性、及び、それらを通じた学校・家庭・地域の連携協力の促進、(5) 省令改正を踏まえ、従来の「外部評価」を「学校関係者評価」に改めるとともに、評価者に保護者を加えることを基本とすること、(6) 学校関係者評価の意義について、自己評価の客観性・透明性を高めることとともに、これを通じて学校の状況に関する共通理解を深め、学校・家庭・地域の連携協力を促すことを目的とすること、(7) 情報提供の充実が学校と保護者との間の理解を深め協調関係の構築に資することを踏まえ、学校評価結果も含め広く情報を提供すること、(8) 学校評価の結果を設置者に報告することにより、設置者が学校に対して適切に人事・予算上の支援・改善策を講じること。

学校評価制度そのものの意義は認めつつも、学校現場では、多忙な現実も相まって、決して好意的に受け取られていない部分がある。そのことが、学校の問題解決力の低下をもたらすことも考えられる。そこで、鳴門市教育委員会と連携し、学校評価が学校改善に機能的に働くように設計された「鳴門プラン」を久我らとともに開発した(久我ほか、2008)。その特徴は、以下の5点である。

- (1) 組織マネジメントの考え方に基づいた、自主的・自律的な学校運営を実現
- (2) 全教職員によって、目標の重点化と具体的な取組づくりを進めることによって、教職員の内発的な協働を産み出す
- (3) 目標・取組を保護者・地域住民へ情報提供するとともに共有することによって、連携・協力関係を構築する。さらに、子どもとも目標・取組を共有し、子どもの自主的な学びと自律的な生活改善を引き出す
- (4) 設置者(教育委員会)と学校との連携を強化する応答ツールとしての学校評価システムを構築する
- (5) 改善的評価だけでなく、診断的評価を組み込む

これらの特徴を備えた学校評価システムを構築し、市内のすべての小中学校に導入した。また、子ども、保護者の意識を把握するため、市内共通の学校評価アンケート項目を設定した(子ども向け20項目、保護者向け21項目)。さらに、この集計に関して大学の資源を活用し、学校の支援に当たった。

この取り組みは、平成20年、21年に教職大学院の設置に伴う政策課題対応経費として採択された「学校改革支

援チームによる地元学校への支援」から継続して取り組んできたもので、本学教職大学院の連携協力校の協定を締結した鳴門市、松茂町、北島町、藍住町の全公立小中学校（全37校）に対する、支援を行うことで、大学と教育委員会、学校の連携構築を図ることをねらいとしてきた。その具体的な事業の一つの柱が、学校評価に対する支援事業である。学校に対するサポートの実績として、平成20年度は15校、平成21年度は23校の学校評価の支援を実施した。また事業終了後も、学校評価支援に対する要望は高く、平成22年度には、本学教育研究支援プロジェクト経費「地元学校と連携した学校組織改善プロジェクト」を取得し、26校の支援を行った。平成23年度については、プロジェクト経費を獲得できなかったが、主要メンバーの研究費等を充てることで、サポート授業をなんとか継続し、28校の支援を行ってきた。このようなサポートに対する学校側の期待も大きく、学校評価支援に対する地元学校および地元教育委員会からの要望は強い。あわせて単に実習等を大学側が依頼するだけでなく、学校にとってもメリットのある互恵的な関係構築にも、この事業は大きく貢献している。

学校評価の義務化から4年が経過し、形式的には一定の定着が見られといわれているが、学校評価制度の理解と活用については、学校および管轄する教育委員会も手探りの状況がある。また、自己評価書を作成するために必要なデータ（保護者および児童生徒のアンケート結果等）の整理に、多くの時間がとられ、日常業務を逼迫があるという状況も見られる。特に、データ整理や分析が、小中学校の教頭にゆだねられることが多く、管理職の負担がいつそう高まっている。

これらのことから、学校評価の理解と活用に資する学校評価支援を本学が行うことに対する地元の要望は強い。特に、鳴門市をはじめとする近隣の小中学校においては、学部、長期履修学生、教職大学院院生の実習などで、多くの負担をかけている。大学と教育委員会、学校との連携構築という観点からも、本事業の必要性は非常に大きいと考えられる。

研究面からいうと、鳴門市においては、児童・生徒用、および保護者用アンケートにおいて、共通項目が設定され、縦断的なデータが蓄積されている。市内ほぼすべての小中学校の縦断的なデータを分析する意義は大きい。それにより、単独のデータ分析では得られない知見を市内の学校の改善に活用できるとともに、縦断的な分析の重要性が論じられている研究面でも、意義は大きい。

一方、平成22年7月にガイドラインが一部改訂され、「第三者評価の意義」が強調されるようになった。第三者評価を義務づけるものではないが、評価結果を有効活用する際、外部の専門的な知識を持ったものの力を借りることの意義が強調されている。今回、鳴門市教育委員会と教職大学院の間で、学校評価に関する協定を結ぶ方向で議論を進めている。教育委員会側からすれば、学校評価に関する第三者評価的な役割を果たすことが期待できる。教職大学院側からは、大学の資源の有効活用を図り、鳴門市との連携をさらに深める一因となるとともに、今回分析する、縦断的なデータ分析を行うことにより、研究面での寄与も期待される。

Ⅱ 課題設定

今回、鳴門市の調査結果より分析するのは、小中の接続の問題である。小中接続の問題として、中1ギャップと呼ばれる現象が問題となっている。中1ギャップは、小学生から中学1年生になったことがきっかけとなり、学習や生活の変化になじめずに不登校となったり、いじめが増加するという現象。ギャップの典型例として、コミュニケーションの苦手な生徒が小学校時の友人や教師の支えを失う「喪失不安増大型」、小学校でリーダーとして活躍していた生徒が中学校で自己有用感を感じられなくなってしまう「自己発揮機会喪失ストレス蓄積型」があるといわれている（富山県総合教育センターホームページより）。実際、中学1年で不登校生徒が増大する、生徒指導の課題が大規模に増加するといった問題が目立つ。しかし、子どもたちにどのような変化が起きているのか、明らかにした研究は少ない。酒井（2007）は、小学6年から中学1年の継続的な調査の結果から、学習意欲に関して、中学入学直後に上昇するものの、やがて下降する実態などを明らかにしている。また、鈴木（1993）も、子どもの効力感が、中学進学において、変化する実態を明らかにしている。これらの結果は、小規模なものであったり、限界も見られる。というのも、移行の変化を見るためには、縦断的な調査が必要となり、特に、小学校から中学校への移行において、継続的に調査するのは困難なことがあげられる。今回、鳴門市における学校評価の結果を再分析することにより、様々な規模の学校段階で、小中の接続における子どもの意識、そして保護者の意識がどのように変化しているか明らかにできる。小中の接続の中で、子どもたちの意識にどのような変化が見られるのか、それは、学校規模によって違いがみられるか、分析を行う。

Ⅲ 研究の方法

今回使用するデータは、2010年の小学校6年のデータとその子どもの進学先である2011年の中学校のデータである。大規模中学校のA中学校と、その校区にあるa1～a4小学校（a5小学校のデータは学校全体の平均となっているため使用せず）、中規模校のB中学校とその校区にあるb1、b2小学校、小規模校のC中学校とその校区にあるc1、c2小学校である。それぞれの学校において、子ども調査は学級担任が学級活動の時間などを活用して実施、保護者調査は、家庭に配布し、学校で回収する形となり、どの学校も高い回収率となっている。調査対象数は表1の通りである。調査時期は、小学校データは2010年12月～2011年1月実施、中学校データは、2011年12月～2012年1月である。各学校のデータについては、教育委員会より提供を受け、大学で再分析を行った。

表1 調査対象者数

	子ども		保護者	保護者
a1小	69	計：204	61	計：168
a2小	56		40	
a3小	52		41	
a4小	27		26	
A中	256		227	
b1小	42	計：56	36	計：48
b2小	12		12	
B中	49		39	
c1小	30	計：32	27	計：29
c2小	2		2	
C中	27		27	

Ⅳ 結果

学校評価に関する質問項目（子ども20問、保護者21問）の中から、子ども調査に関しては、子ども自身に関する意識（3問）、対教師関係（3問）の結果を分析する。保護者調査に関しては、子どもの学校の状況について（2問）、学校の取り組み状況（3問）、保護者の学校への関わり（1問）を分析する。これらの項目を分析することで、小中の中で、子どもたちの意識及び保護者の意識の変容がどのように見られるか、明らかにする。

次に、それらの項目について、校区の小学校の結果を統合し、規模ごとに、小中の中で、意識の差異が見られるか、検定を行い、さらに分析する。

1 学校別分析

1) 子ども調査

①自身に関する意識

子ども調査について、子どもの学校に関する意識として、「私は、学校へ行くのが楽しい」「私は、計算や漢字の力がついてきている」「私は、人のことを大切に、友だちと仲良くしている」の3項目である。学校全般への適応、学習面での意識、友だち関係に関する関係を見るため、3項目を選んだ。

学校全般への適応の結果を見ると（表2）、多少のばらつきはあるが、小中とも大きな差が見られない。

学力面に関する意識について（表3）は、規模にかかわらず、中学校で低下傾向が見られる。学習内容が難しくなることが影響していると考えられる（a2小学校は、この項目について、調査をしなかった）。

表2 わたしは、学校へ行くのが楽しい

	よくあてはまる	ややあてはまる	あまりあてはまらない	まったくあてはまらない	無答
a1小	47.8%	40.6%	11.6%		
a2小	48.2%	41.1%	10.7%		
a3小	32.7%	53.8%	9.6%	3.8%	
a4小	37.0%	48.1%	11.1%	3.7%	.0%
A中	37.1%	49.1%	9.9%	3.4%	0.4%
b1小	35.7%	50.0%	2.4%	11.9%	
b2小	41.7%	50.0%	8.3%	0.0%	0.0%
B中	46.9%	34.7%	12.2%	6.1%	
c1小	56.7%	40.0%	3.3%		
c2小		100.0%			
C中	14.8%	63.0%	22.2%		

表3 わたしは、計算や漢字の力がついてきている

	よくあてはまる	ややあてはまる	あまりあてはまらない	まったくあてはまらない	無答
a1小	40.7%	40.7%	18.5%	.0%	.0%
a2小					
a3小	23.1%	53.8%	21.2%	1.9%	
a4小	14.5%	62.3%	21.7%	1.4%	
A中	6.0%	59.9%	27.6%	6.0%	0.4%
b1小	33.3%	50.0%	11.9%	4.8%	
b2小	33.3%	58.3%	8.3%	0.0%	0.0%
B中	14.3%	49.0%	28.6%	8.2%	
c1小	30.0%	66.7%	3.3%		
c2小		100.0%			
C中	3.7%	70.4%	22.2%	3.7%	

交友関係面で見ると（表4）と、これも、規模別に見ても、小中で大きな差が見られない。小中ギャップの原因の一つとして、交友関係の影響があげられるが、今回の結果を見ると、全般的には良好であることがわかる。

②対教師関係

対教師関係として、「先生は、毎日の授業をわかりやすく教えてくれる」「先生は、いじめやけんかがあったとき、しっかりと話を聴いて解決しようとしてくれる」「先生は、勉強や運動、生活でがんばったときに褒めてくれる」の3項目を用いた。

わかりやすく教える、という項目について（表5）は、どの規模においても、中学の結果が悪くなっている。授業のテンポが速くなる、定期試験などで成績が明確になるといったことが影響を与えていると考えられる。

表4 わたしは、人のことを大切にして、友だちと仲良くしている

	よくあてはまる	ややあてはまる	あまりあてはまらない	まったくあてはまらない	無答
a1小	42.0%	46.4%	11.6%		
a2小	39.3%	57.1%	3.6%		
a3小	34.6%	57.7%	7.7%		
a4小	29.6%	63.0%	3.7%	3.7%	.0%
A中	38.4%	50.4%	7.8%	2.2%	1.3%
b1小	64.3%	28.6%	4.8%	2.4%	
b2小	58.3%	41.7%	0.0%	0.0%	0.0%
B中	40.8%	49.0%	6.1%	4.1%	
c1小	60.0%	36.7%	3.3%		
c2小	50.0%	50.0%			
C中	37.0%	55.6%	7.4%		

表5 先生は、毎日の授業を分かりやすく教えてくれる

	よくあてはまる	ややあてはまる	あまりあてはまらない	まったくあてはまらない	無答
a1小	15.9%	66.7%	14.5%	2.9%	
a2小	58.9%	39.3%	1.8%		
a3小	50.0%	36.5%	9.6%	3.8%	
a4小	55.6%	40.7%	3.7%	.0%	.0%
A中	25.9%	59.5%	12.5%	1.3%	0.9%
b1小	57.1%	28.6%	11.9%	2.4%	
b2小	75.0%	16.7%	8.3%	0.0%	0.0%
B中	30.6%	44.9%	16.3%	8.2%	
c1小	56.7%	43.3%			
c2小	100.0%				
C中	14.8%	81.5%	3.7%		

問題が起きた時への対応について（表6）も、小学校に比べ、中学校の結果は全般的に教師への信頼が低い結果となっている。ただし、大規模校のA中学校区の結果は小中で差が小さい。小学校でも規模が大きくなれば、

教師への信頼が低い可能性が示唆される。

先生が褒めてくれる、という項目について（表7）は、小中の差というよりも、小学校でも、学校規模の小さいところで肯定的な回答が高いことがわかる。小規模で、教師一人あたりの子どもの数の少ないことが、褒める行為の量に影響を与えていると考えられる。

表6 先生は、いじめやけんかがあったとき、しっかりと話を聞いて解決しようとしてくれる

	よくあてはまる	ややあてはまる	あまりあてはまらない	まったくあてはまらない	無答
a1小	21.7%	59.4%	11.6%	7.2%	
a2小	57.1%	41.1%	1.8%		
a3小	55.8%	19.2%	17.3%	7.7%	
a4小	70.4%	22.2%	3.7%	3.7%	.0%
A中	31.5%	42.7%	17.2%	6.9%	1.7%
b1小	54.8%	40.5%	2.4%	2.4%	
b2小	66.7%	25.0%	8.3%	0.0%	0.0%
B中	28.6%	34.7%	18.4%	16.3%	2.0%
c1小	46.7%	50.0%	3.3%		
c2小	100.0%				
C中	37.0%	33.3%	22.2%	7.4%	

表7 先生は、勉強や運動、生活でがんばったときにほめてくれる

	よくあてはまる	ややあてはまる	あまりあてはまらない	まったくあてはまらない	無答
a1小	20.3%	47.8%	26.1%	5.8%	
a2小					
a3小	26.9%	34.6%	25.0%	13.5%	
a4小	63.0%	25.9%	7.4%	3.7%	.0%
A中	25.0%	45.3%	24.6%	4.7%	0.4%
b1小	28.6%	42.9%	16.7%	11.9%	
b2小	66.7%	8.3%	25.0%	0.0%	0.0%
B中	20.4%	40.8%	28.6%	10.2%	
c1小	63.3%	36.7%			
c2小	50.0%	50.0%			
C中	11.1%	55.6%	33.3%		

2) 保護者調査

①子どもの状況について

保護者調査の中から、子どもの状況について尋ねた項目の内、「子どもは、楽しんで学校へ行っている」「子どもはルールを守る意識が育っている」の2項目を取り上げる。

学校への適応について（表8）は、学校種、学校規模において、大きな差は見られない。多くの保護者が、子どもは学校に適応できていると考えているようである。

子どもの規範意識の状態を尋ねた項目（表9）を見ても、学校種、学校規模において大きな差は見られない。

表8 子どもは、楽しんで学校へ行っている

	よくあてはまる	ややあてはまる	あまりあてはまらない	まったくあてはまらない	無答
a1小	57.4%	41.0%	1.6%		
a2小	52.5%	45.0%	2.5%		
a3小	43.9%	41.5%	12.2%	2.4%	
a4小	53.8%	38.5%	7.7%	.0%	.0%
A中	46.3%	45.4%	7.0%	1.3%	0.0%
b1小	47.2%	47.2%	5.6%		
b2小	58.3%	41.7%	0.0%	0.0%	0.0%
B中	35.9%	56.4%	5.1%	2.6%	
c1小	51.9%	48.1%			
c2小		50.0%	50.0%		
C中	25.9%	51.9%	22.2%		

表9 子どもは、ルールを守る意識が育っている

	よくあてはまる	ややあてはまる	あまりあてはまらない	まったくあてはまらない	無答
a1小	30.8%	57.7%	11.5%	.0%	.0%
a2小	27.5%	72.5%			
a3小	31.7%	53.7%	14.6%		
a4小	29.5%	55.7%	11.5%	1.6%	1.6%
A中	29.5%	60.8%	9.3%	0.4%	0.0%
b1小	38.9%	47.2%	13.9%		
b2小	25.0%	75.0%	0.0%	0.0%	0.0%
B中	28.2%	48.7%	23.1%		
c1小	37.0%	55.6%	7.4%		
c2小	50.0%	50.0%			
C中	25.9%	66.7%	7.4%		

教師の意識としては、子どもの規範意識の低下が問題としてとらえられるケースが多いが、多くの保護者は、自分の子どもに対して課題を感じていないことがわかる。学校も、子どもの実態を今まで以上に丁寧に伝えることも必要ではないか。

②学校の取り組みについて

学校の取り組みについては、「学校は学力向上に向けて熱心に取り組んでいる」「学校は保護者からの相談に誠実に対応してくれる」「学校はいじめや生徒指導上の問題に素早く対応してくれる」の3項目を用いた。

学力向上の取り組みについて(表10)は、多少のばらつきはあるものの、8割近くが肯定的な回答となっている。全国学力・学習状況調査が行われるようになり、学校における学力に対する関心は高まってきている。小学校においても、確かな学力の定着が重要視されていることがこうした結果になって現れている。「よくあてはまる」という強い肯定が小学校で高いが、定期試験のように、子どもの学力実態が明確になる機会が少ないため、小学校で肯定傾向が強くなるのかもしれない。

保護者からの相談に対する学校の対応について(表11)も、小中で大きな差は見られない。小学校の方が学級担任制のため、保護者との距離は近いと思われたが、実際には目立った差は見られない。ただ、a1小、a3小のように「よくあてはまる」と回答した割合が高い場合もあり、教師と保護者の距離感、小学校の方が近い可能性がある。

表10 学校は、学力向上に向けて熱心に取り組んでいる

	よくあてはまる	ややあてはまる	あまりあてはまらない	まったくあてはまらない	無答
a1小	19.2%	69.2%	11.5%	.0%	.0%
a2小	20.0%	65.0%	12.5%	2.5%	
a3小	24.4%	61.0%	12.2%	2.4%	
a4小	11.5%	62.3%	21.3%	4.9%	
A中	12.8%	65.6%	19.8%	1.8%	0.0%
b1小	22.2%	69.4%	5.6%	2.8%	
b2小	33.3%	50.0%	16.7%	0.0%	0.0%
B中	10.3%	64.1%	25.6%		
c1小	18.5%	70.4%	11.1%		
c2小	50.0%	50.0%			
C中	7.4%	74.1%	14.8%	3.7%	

表11 学校は、保護者からの相談に誠実に対応してくれる

	よくあてはまる	ややあてはまる	あまりあてはまらない	まったくあてはまらない	無答
a1小	46.2%	34.6%	19.2%	.0%	.0%
a2小	20.0%	67.5%	10.0%	2.5%	
a3小	43.9%	43.9%	9.8%	2.4%	
a4小	19.7%	65.6%	11.5%	3.3%	
A中	18.1%	67.4%	11.5%	3.1%	0.0%
b1小	16.7%	72.2%	8.3%	2.8%	
b2小	16.7%	66.7%	16.7%	0.0%	0.0%
B中	12.8%	74.4%	12.8%		
c1小	18.5%	74.1%	7.4%		
c2小		50.0%	50.0%		
C中	11.1%	63.0%	22.2%	3.7%	

いじめや生徒指導上の問題に対する対応(表12)を見ると、小学校の方が若干肯定的な回答が多い。中学になると、大人として扱われる傾向があり、問題解決を生徒たちの自主性に期待することが指摘されることもあるが、それほど差としてあらわれてこない。いじめ問題の深刻化、子どもたちが自分たちで問題を解決できる力が弱くなっていることなどもあり、中学校においても、素早い対応が進められているのかもしれない。

③保護者の学校への関わり

保護者の学校への関わりは、小中で大きな差が見られる。中学校での参観に誰も来ない、という話を学校から聞くことも多いが、実際の結果とも表れている。しかし、小学6年で8割以上のものが参加しているのに対し、中学1年になると半数近くのものに参加しなくなるのは課題であろう。子どもがいやがる、子どもが大きくなったからパートなどを始める、といった理由も聞こえてくるが、学校のことに関心を持ってもらうためには、参観などの機会に参加してもらうことが重要である。中学校も、参加者が増加するような取り組みを考えていく必要がある。

表12 学校は、いじめや生徒指導上の問題に素早く適切に対応してくれる

	よくあてはまる	ややあてはまる	あまりあてはまらない	まったくあてはまらない	無答
a 1 小	34.6%	46.2%	15.4%	3.8%	.0%
a 2 小					
a 3 小	24.4%	43.9%	29.3%	2.4%	
a 4 小	13.1%	63.9%	23.0%		
A 中	15.0%	59.0%	22.5%	3.1%	0.4%
b 1 小	13.9%	63.9%	13.9%	2.8%	5.6%
b 2 小	16.7%	66.7%	16.7%	0.0%	0.0%
B 中	12.8%	56.4%	23.1%	7.7%	
c 1 小	14.8%	74.1%	7.4%		3.7%
c 2 小		100.0%			
C 中	11.1%	70.4%	18.5%		

表13 参観日や学校行事などの機会には、毎回、学校へ行っている

	よくあてはまる	ややあてはまる	あまりあてはまらない	まったくあてはまらない	無答
a 1 小	50.0%	38.5%	11.5%	.0%	
a 2 小					
a 3 小	36.6%	41.5%	19.5%	2.4%	
a 4 小	29.5%	49.2%	16.4%	4.9%	
A 中	7.0%	39.2%	40.1%	12.8%	0.9%
b 1 小	50.0%	33.3%	13.9%	2.8%	
b 2 小	66.7%	33.3%	0.0%	0.0%	0.0%
B 中	17.9%	48.7%	30.8%	2.6%	
c 1 小	37.0%	63.0%			
c 2 小	50.0%	50.0%			
C 中	7.4%	48.1%	37.0%	7.4%	

2 規模別小中の比較

これまで見てきた結果について、小学校のデータを一つに統合し、それぞれの学校規模別に小中で差が見られるか分析する。

1) 子ども調査の比較

①自身に関する意識

「学校に行くのが楽しい」について（表14）は、小規模のC中学校区のみ、有意差が見られる。ただ、この結果については、検討を要する。この年度のみの可能性も考えられる。全般的には、学校に対する満足度に小中で大きな影響はないように思われる。

基本的な学力の定着について（表15）は、どの校区においても有意差が見られる。学習内容が難しくなることが影響していると考えられる。小中の段差について、もう少しなだらかにすることを考えていく必要がある。

表14 わたしは、学校へ行くのが楽しい

	よくあてはまる	ややあてはまる	あまりあてはまらない	まったくあてはまらない	無答	有意差
A 中学校区	小	42.6%	45.1%	10.8%	1.5%	n.s.
	中	37.1%	49.1%	9.9%	3.4%	
B 中学校区	小	37.0%	50.0%	3.7%	9.3%	n.s.
	中	46.9%	34.7%	12.2%	6.1%	
C 中学校区	小	53.1%	43.8%	3.1%		***
	中	14.8%	63.0%	22.2%		

表15 わたしは、計算や漢字の力がついてきている

	よくあてはまる	ややあてはまる	あまりあてはまらない	まったくあてはまらない	無答	有意差	
A 中学校区	小	29.6%	49.0%	20.0%	1.3%	0	***
	中	6.0%	59.9%	27.6%	6.0%	0.4%	
B 中学校区	小	33.3%	51.9%	11.1%	3.7%	0	**
	中	14.3%	49.0%	28.6%	8.2%		
C 中学校区	小	28.1%	68.8%	3.1%	0.0%	0	**
	中	3.7%	70.4%	22.2%	3.7%		

友だち関係について（表16）は、どの校区も有意差が見られない。小中ギャップにおいて、人間関係の変化が問題にされるが、全般的に関係がぎくしゃくするというより、人間関係の変化に敏感な子どもが強く影響を受けるのかもしれない。

②対教師関係

学習指導に関する子どもの評価（表17）は、どの中学校区でも有意差が見られる。小学校の方が、指導面で丁寧であること、学力差が見えにくいことなどが影響していると思われる。

表16 わたしは、人のことを大切に、友だちと仲良くしている 表17 先生は、毎日の授業を分かりやすく教えてくれる

		よくあてはまる	ややあてはまる	あまりあてはまらない	まったくあてはまらない	無答	有意差
A 中校区	小	37.7%	54.4%	7.4%	0.5%		n.s.
	中	38.4%	50.4%	7.8%	2.2%	1.3%	
B 中校区	小	63.0%	31.5%	3.7%	1.9%		n.s.
	中	40.8%	49.0%	6.1%	4.1%		
C 中校区	小	59.4%	37.5%	3.1%			n.s.
	中	37.0%	55.6%	7.4%			

		よくあてはまる	ややあてはまる	あまりあてはまらない	まったくあてはまらない	無答	有意差
A 中校区	小	41.7%	48.0%	8.3%	2.0%		***
	中	25.9%	59.5%	12.5%	1.3%	0.9%	
B 中校区	小	61.1%	25.9%	11.1%	1.9%		**
	中	30.6%	44.9%	16.3%	8.2%		
C 中校区	小	59.4%	40.6%				***
	中	14.8%	81.5%	3.7%			

いじめ等の指導に関して（表18）も、すべての校区で小中に差が見られる。全般的に小学校の方が、子どもと教師の関係に近い感情対を保てること（学級担任制など）が影響を与えているのであろう。

がんばりを認めるという項目について（表19）は、小規模のC中学校区のみ有意差が見られる。前に見た学校への満足度の結果と併せて考えると、子どもと教師の信頼関係の部分に、C中学校の課題があると推察される。ただし、C中学校の小学校を除き、ほとんどの学校で3割近くのもの褒められないと感じていることは課題であらう。子どもたちを認めることの重要性は、多く指摘されており（たとえば、宮腰（1992）など）、そうした点から、褒め方について、鳴門市として、研修を持つことが重要ではないか。

表18 先生は、いじめやけんかがあったとき、しっかりと話を聞いて解決しようとしてくれる 表19 先生は、勉強や運動、生活でがんばったときにほめてくれる

		よくあてはまる	ややあてはまる	あまりあてはまらない	まったくあてはまらない	無答	有意差
A 中校区	小	46.6%	39.2%	9.3%	4.9%		***
	中	31.5%	42.7%	17.2%	6.9%	1.7%	
B 中校区	小	57.4%	37.0%	3.7%	1.9%		***
	中	28.6%	34.7%	18.4%	16.3%	2.0%	
C 中校区	小	50.0%	46.9%	3.1%			*
	中	37.0%	33.3%	22.2%	7.4%		

		よくあてはまる	ややあてはまる	あまりあてはまらない	まったくあてはまらない	無答	有意差
A 中校区	小	30.4%	39.2%	22.3%	8.1%		n.s.
	中	25.0%	45.3%	24.6%	4.7%	0.4%	
B 中校区	小	37.0%	35.2%	18.5%	9.3%		n.s.
	中	20.4%	40.8%	28.6%	10.2%		
C 中校区	小	62.5%	37.5%				***
	中	11.1%	55.6%	33.3%			

2) 保護者調査

①子どもの状況について

子どもの学校への満足度（表20）については、子ども調査の結果と同様で、C中学校区のみ有意差が見られる。ただ、全体的に否定的な回答は少なく、おおむね満足して学校に通っていると評価している。

ルールを守る意識（表21）については、3校区とも有意差は見られない。子ども調査の場合、小学校での肯定的な回答の割合が高かったが、保護者はそれほど差を感じていないことがわかる。

表20 子どもは、楽しんで学校へ行っている

		よくあてはまる	ややあてはまる	あまりあてはまらない	まったくあてはまらない	無答	有意差
A 中校区	小	52.4%	41.7%	5.4%	0.6%		n.s.
	中	46.3%	45.4%	7.0%	1.3%	0.0%	
B 中校区	小	50.0%	45.8%	4.2%	0.0%		n.s.
	中	35.9%	56.4%	5.1%	2.6%		
C 中校区	小	48.3%	48.3%	3.4%	0.0%		*
	中	25.9%	51.9%	22.2%			

表21 子どもは、ルールを守る意識が育っている

		よくあてはまる	ややあてはまる	あまりあてはまらない	まったくあてはまらない	無答	有意差
A 中校区	小	29.8%	59.5%	9.5%	0.6%		n.s.
	中	29.5%	60.8%	9.3%	0.4%	0.0%	
B 中校区	小	35.4%	54.2%	10.4%	0.0%		n.s.
	中	28.2%	48.7%	23.1%			
C 中校区	小	37.9%	55.2%	6.9%	0.0%		n.s.
	中	25.9%	66.7%	7.4%			

このことは、学力についての取り組み(表22)でも同様である。この結果もどの校区でも有意差が見られない。子どもの状況については、一般的に保護者の意識は、小中で変化が見られない。

②学校の取り組みについて

学校の保護者対応について(表23)、大規模のA中学校区のみ、小中で差が見られる。「よくあてはまる」の回答の割合が高いためであるが、実際に起こった問題への対応がよかったなどの、個別の理由が原因かもしれない。

表22 学校は、学力向上に向けて熱心に取り組んでいる

		よくあてはまる	ややあてはまる	あまりあてはまらない	まったくあてはまらない	無答	有意差
A 中学校区	小	19.6%	64.9%	13.7%	1.8%		n.s.
	中	12.8%	65.6%	19.8%	1.8%	0.0%	
B 中学校区	小	25.0%	64.6%	8.3%	2.1%		n.s.
	中	10.3%	64.1%	25.6%			
C 中学校区	小	20.7%	69.0%	10.3%	0.0%		n.s.
	中	7.4%	74.1%	14.8%	3.7%		

表23 学校は、保護者からの相談に誠実に対応してくれる

		よくあてはまる	ややあてはまる	あまりあてはまらない	まったくあてはまらない	無答	有意差
A 中学校区	小	35.1%	49.4%	13.7%	1.8%		***
	中	18.1%	67.4%	11.5%	3.1%	0.0%	
B 中学校区	小	16.7%	70.8%	10.4%			n.s.
	中	12.8%	74.4%	12.8%			
C 中学校区	小	17.2%	72.4%	10.3%			n.s.
	中	11.1%	63.0%	22.2%	3.7%		

いじめへの対応について(表24)も、有意差は出ていないが、A中学校区の小学校の「よくあてはまる」の回答が高いことがわかる。

③保護者の学校への関わり

最後に、保護者の学校への関わり(表25)であるが、これは、どの校区でも小中で差が大きい。これ以外の「PTA活動への参加」などについても、同様に差が大きく、中学校として改善すべき点であろう。

表24 学校は、いじめや生徒指導上の問題に素早く適切に対応してくれる

		よくあてはまる	ややあてはまる	あまりあてはまらない	まったくあてはまらない	無答	有意差
A 中学校区	小	26.6%	49.2%	21.9%	2.3%		n.s.
	中	15.0%	59.0%	22.5%	3.1%	0.4%	
B 中学校区	小	14.6%	64.6%	14.6%	2.1%		n.s.
	中	12.8%	56.4%	23.1%	7.7%		
C 中学校区	小	13.8%	75.9%	6.9%	0.0%		n.s.
	中	11.1%	70.4%	18.5%			

表25 参観日や学校行事などの機会には、毎回、学校へ行っている

		よくあてはまる	ややあてはまる	あまりあてはまらない	まったくあてはまらない	無答	有意差
A 中学校区	小	42.2%	41.4%	14.8%	1.6%		***
	中	7.0%	39.2%	40.1%	12.8%	0.9%	
B 中学校区	小	54.2%	33.3%	10.4%	2.1%		***
	中	17.9%	48.7%	30.8%	2.6%		
C 中学校区	小	37.9%	62.1%				***
	中	7.4%	48.1%	37.0%	7.4%		

V 考察

子ども調査及び保護者調査の結果から、次のことが明らかになった。

1 子ども調査結果より

子ども用質問紙の中から、自身に関して、対教師関係について6項目を取り上げて分析した結果、学習に関する意識について、小中で差が見られた。学習内容が難しくなる、定期試験などで自身の学力状況が明らかになるなどが相まって、1年間の間に、評価が低下した。これは、学校規模にかかわらず、すべての中学校区で見られた。一方、友だち関係については、どの中学校区でも有意差は見られず、一般的には、小学校から中学に進学することで、友だち関係の評価が変わるということはない。ただし、不登校になるなどの現象が見られるのは、限定的であり、そうした状況に陥りやすい子どもについて、小中が連携を密にすることは必要であろう。

対教師関係については、学習指導、いじめへの対応の項目について、差が見られた。小中において、教師関係

が変化していることが予想される。一方、褒めるという行為については、小中で大きな差は見られなかった。小学校の教師の方が褒める傾向が強いと予想されたが、C中学校区の小学校を除き、3割近い子どもたちが褒められていないと感じている結果は問題として指摘できるであろう。

2 保護者調査結果より

子ども調査の結果と違い、保護者調査では、ほとんどの項目で、小中の中で差が見られなかった。子どもたちの変化を十分捉えられていないのか、それとも、中学に上がったので変化して当たり前と考え、特に問題視していないか、判断できないが、子どもの出すサインを保護者が十分とらえていない危険性がある。

一方、保護者の学校への参加については、小中で大きな差が現れた。子どもは成長し、保護者の手の内から離れていくが、中学に上がったとたん、急に関わりが変化するのは、課題であろう。特に、中1ギャップと呼ばれるように、小中接続の問題が指摘されている現状において、保護者の意識を改善する中学校の取り組みを進めていく必要がある。

VI 今後の課題

今回は、2010年の小学6年の結果と2011年の中学1年の結果を比較した。それ以外の年度を比較することで、さらに接続の問題をクリアにできるため、次年度以降、さらに分析を進める必要がある。また、接続に焦点を当てた質問項目を加えることで、さらに接続の課題を詳細に分析することも課題としてあげられよう。

一方、これらの結果を教育委員会、学校と共有し、接続の課題について、具体的な改善計画を立てることも進めていく必要がある。この点については、来年度に向けて、鳴門市教育委員会と本学の間で連携協定を締結する予定となっており、その中で実行していく。

参考文献

- 菊池知美, 松本聡子, 菅原ますみ (2011) 幼稚園・保育所に対する両親の期待：年中時から年長時への縦断的变化発達心理学研究発達心理学研究22 (1), 55-62
- 鈴木真雄 (1993) 子どもの効力感の発達2：小学校5年から中学2年までの縦断的調査, 愛知教育大学研究報告. 教育科学42, 65-74,
- 酒井朗 (2000) 首都圏における中学進学問題と学校適応－小中移行の追跡パネル調査をもとに－ 酒井朗・青木紀久代・菅原ますみ編 子どもの発達危機の理解と支援－漂流する子ども 金子書房, 81-97ページ
- 酒井朗 (2010) 移行期の危機と校種間連携の課題に関する教育臨床社会学：「なめらかな接続」再考（〈特集〉学校間接続をめぐる問題と今後の課題） 教育学研究77 (2), 132-143
- 宮腰誠 (1992) 子どもが「やる気」を起こすとき 佐伯胖, 汐見稔幸, 佐藤学編 学校の再生をめざして (2) 教室の改革 東京大学出版会 1-23
- 久我直人, 葛上秀文, 佐古秀一 (2008) 学校改善のための学校評価システムの構築に関する実践研究：学校, 教育委員会と大学の連携による学校評価の充実・改善に向けた取組 鳴門教育大学学校教育研究紀要23, 55-62, 2008

A Study on Consciousness of Children and Parents Changing from Sixth Grade at Elementary Schools to First Grade at Junior High Schools

—— From outcomes of surveys of elementary and junior high schools in Naruto city ——

KUZUKAMI Hidefumi

(Keywords : Survey of consciousness, Gap between sixth grade and seventh grade, Longitudinal study)

This article discusses how the consciousness of children and parents change from the sixth grade at the elementary school to the first grade at a junior high school. The data are reanalyzed the result of investigations at Naruto City. As a result, we find that (1) the evaluation of achievement at the junior high schools is lower than it at the elementary schools, (2) An evaluation of the student-teacher relations decreased every point of view at the junior high schools, (3) The parents investigation is not seen in the difference of the small generally, (4) By the school scale distinction, the big difference is not seen with a child investigation, the parents investigation either.